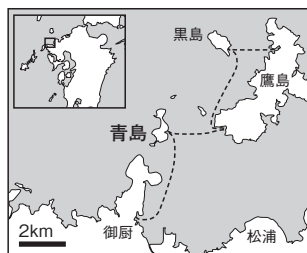


青島体験振興会

二〇〇人の島で、全国に先駆けた 海の体験民泊を展開

本誌編集部



青島：松浦市御厨港の北約5kmに位置する島。面積0.90km²、89世帯202人(平成30年10月末現在)。もとは砂州で結ばれた3つの島だったが干拓で一続きになり、干拓地には水田が開かれ、半農半漁の暮らしが営まれてきた。現在は養殖業と沿岸漁業、水産加工が主産業。

島のなりわいを体験するプログラム

対岸本土の松浦市御厨^{みくりや}から一日四便のフェリーで二〇分。青島は伊万里湾と玄界灘の境に位置する小さな島である。周辺は魚類養殖の筏が浮かぶ豊かな海であり、二〇〇人ほどの住民の大半が沿岸漁業や養殖業、水産加工業に従事している(本号グラビア参照)。

平成三〇年十一月下旬、午後の定期船で広島県福山市にある市立幸千中学校(藤井かよ校長)の修学旅行生二二二人のうち、七三人がこの島を訪れた。

到着後、体験活動に移る。メニューごとに数人ずつのグループに分かれ、島の大人たちがインストラクターとしてそれぞれ釣り竿の扱い方を教えたり、延縄^{はえなわ}の釣り鉤に餌をつけさせたりする。お母さんたちに引率され、かまぼこづ

くりのために集落内のお宅へと向かう組もある。

救命胴衣を身につけ漁船に乗って沖に出て行く船釣りやタコ漁、養殖場エサやりグループ。見事に大きなタイを釣り上げた船端では、仲間の生徒たちから歓声上がる。ほかにも高級魚のイシガキダイや、港釣りではカサゴやヤハギ(スズメダイ)なども釣り上げられている。もちろん自然が相手のこと、本業に熟達した指導者がついているとはいえ、必ずしも釣果が得られるとは限らないし、乗り慣れない船に思いがけず酔ってしまうこともある。

生徒たちを引率する藤井校長は、「幸千校区は福山の内陸部。ほんとうの現場で、海のなりわいに直接触れる体験は貴重」と話す。

夕方には全員が港に戻り、一四軒の民泊受け入れ先との対面式。これから男女別に五、六人ずつ各受け入れ家庭に



受け入れ家庭との対面式にて、幸千中学校の藤井校長先生が挨拶。



島の漁師から餌のつけ方を教わる港釣り体験組。

平成一五年にはじまった体験学習型旅行の受け入れ

分散し、浜の散策のあと、支度を手伝って夕食をとにもするなど、交流を深めていくプログラムである。

青島での体験学習型旅行の受け入れは、今年度で一六年目を迎える。

きっかけは平成一四年、松浦地域の交流人口増加策の一

環として、官民の協働で体験学習型旅行の誘致を図ろうとしていた「まつうら党交流公社」（当時は松浦体験型旅行協議会。註からの呼びかけがあったこと。それに応えて有志で「青島体験振興会」を組織し、翌年、青島で初めて受け入れを実施することになった。当時の島の人口は三〇〇人強。長野県や和歌山県の体験型修学旅行と民泊先進地を視察するなどして、準備をすすめた。

註…修学旅行生などを対象とした体験型観光を展開、交流人口拡大による地域活性化に取り組む組織。

平成一四年、体験学習型旅行の誘致推進組織「松浦体験型旅行協議会」が発足。同一五年、旧一市町村にまたがる受け入れ組織を指導する「松浦党の里体験観光協議会」が設立され（同一八年「NPO法人体験観光ネットワーク松浦党」に）、同二年、両団体が「一般社団法人まつうら党交流公社」として統合。受け入れ地区は同一五年の青島に始まり、現在は松浦市・平戸市・佐世保市の計二三地区。うち離島は二地区（青島・的山大島）、架橋島は五地区（福島・鷹島・生月島・平戸島二地区）。「まつうら党の里ほんなんもん（本物）体験」として、九〇種類もの農林漁業体験プログラムと民泊（一日最大二〇〇人）で、中学校と高校の修学旅行生を全国から年間三万人弱、累計で二五万人以上受け入れてきている。平成一九年にはオーライ！ニッポン大賞内閣総理大臣賞、長崎県民表彰、同二〇年にはJTB文化交流文化賞優秀賞などを受賞している。

設立当初からこの事業に取り組んできたのが、同会会長の山下與範（六〇歳）さんと、副会長の川上一代子（六九歳）。お二方とも青島の生まれ育ちで、山下さんは養殖業に携わり、まつうら党交流公社の副理事長も務める。川上さんは、青島唯一の民宿兼食堂を経営する女将さん。養殖を家業とする川上家に嫁いできた当時、船舶免許を取って漁船を操縦していたこともあるという。

川上さんは、「青島では、祝い事や葬式は自宅で行ってきたし、もてなしも上手。民泊の受け入れも大丈夫」と思ったという。

各家にお願いに回ったところ、最初は「こんな島に来て何をするのか」「海が荒らされる」と軒並み断られた。生徒たちに家の手伝いをさせて報酬を得ることに抵抗があった。

山下さんは「孫が帰って来たつもりで」と協力を仰ぎ、川上さんも「今回だけ」という約束で漁師の奥さんたちに粘り強く呼びかけ、二〇軒ほどに引き受けてもらえた。

最初に受け入れたのは、関東にある高校の修学旅行生約一〇〇人。迎えた当日、到着したフェリーからはズボンをつり下げた男子や、ガングロメイクにルーズソックス姿の女子などが降りてきて、驚愕したという。

そんな生徒たちだったが、海べりを歩きながら「魚がいる」「海の底がみえる」と嬉しそうな顔を見せ、宝の浜に連れて行くと美しい景色に感激を隠さない。夕食も、出し



体験前に、毒を持つ危険な魚について説明をする青島体験振興会の山下與範会長。

たものは平らげ、魚も野菜も美味しいと喜んでくれる。「もう帰りたくない」と言い出す子までいた。

意外な反応を目の当たりにして、島の人たちも「こんなことに感動してくれるのか」と、自らの島が持つ力への気づきを新たにしたという。「思い切って受け入れてよかった」との声も聞こえてきた。

「体験」と「民泊」の切り分けが特徴

初年度の受け入れはわずか二〇〇人だったが、その後は



青島体験振興会の副会長を務める川上一代子さん。

徐々に増えて平成二〇年頃には二〇〇〇人に。現在は、西日本を中心に中高三十数校、三〇〇〇人弱となっている。受け入れは五、六月が多く、年間六〇日程度。大半は一泊二日だが、一つの学校が二連泊するケースもあり、四日連続で複数の学校を受け入れたこともある。体験の評価が高まるにつれ、受け入れ地として青島を指名してくる学校もあるといい、滋賀県のある公立中学校は一三年連続で来島してきている。

民泊の受け入れ家庭はピーク時で二三軒。事業開始当初から継続している家もあれば、高齢になって止めた家、若手に引き継いだ家もあり、いまは実質一五、六軒という。

同様の体験事業を実施している他県の島では、各民泊家

庭の家業をそれぞれ体験させているところもあるが、青島の特徴は「体験」と「民泊」とを切り分けている点だろう。漁師とその奥さんたち、独居の高齢者など、できるだけ多くの住民が、それぞれの立場で無理なく事業に関われるように、漁などの体験指導のみ、民泊受け入れのみで可。民泊家庭の家業で体験ができるのは刺し網漁などに限られるという事情もある。

受け入れにあたっては、まつうら党交流公社が実施する衛生や安全などに関する講習を受け、インストラクターは免許証、体験民家は認定証をそれぞれ交付されている。

ちなみに、この事業による売り上げは年間二二〇〇万円ほど。経費を差し引いて、受け入れ家庭平均で一〇〇万円程度の収入になっているという。

島の人たちの生き甲斐にもなっている民泊

食材はできるだけ地の物を使い、手づくりで。メニューは刺身、煮物、揚げ物など基本だけを決めてあとは各家に任せている。ただし、カレーやハンバーグなどどこでも食べられるものは出さない。食事は一緒につくることになっているが、実際にはあまり時間がないので、子どもたちと一緒にする作業だけ残して済ませている。

なかには初めて温かいものを食べたと感激する子や、手ずからカサゴを捌いて、生命の重みをいただいたという子もいた、と川上さんは振り返る。

「ご飯を食べる前に手を合わせるようになったという手紙をもらったこともあり、退村式では、そういう気持ちを忘れないで、と話すことも。その後、問題を抱えた子がちゃんと登校するようになったとの話も聞いている」

民泊受け入れ側の世代は、五十歳代から七十歳代半ばまで。家業から退いて、細々と畑をつくるだけの生活だったのが、「子どもたちが料理がおいしいと言ってくれ、楽しい思いをさせてもらい、お金に換えられないものをいただいている」という独居のおばあちゃんもいたという。

「島の人たちの生き甲斐にもつながっているようで、自分たちの活動が、少しは島の役に立っていると思える」と川上さんはいう。

島を訪れる側の教育効果だけではなく、受け入れる側にも大きな影響をもたらしている体験民泊事業。住民の所得の向上だけではなく、島に活力を生む役割を果たしているようだ。

受け入れ側の高齢化と後継者不足が課題

山下会長によれば、最大の課題は高齢化と後継者不足。交流公社がコーディネートしている地区全体の傾向だが、年々受け入れ可能な人数が減ってきている、という。

いったん受け入れが決まれば、よほどのことがないと日程の変更は難しい。今回も、受け入れの二日前に川上さんのお義母さんが亡くなったばかりだったが、何とか当日を

迎えることができた。かつては親族の葬式を一日ずらして対応したこともあるという。

また、島ゆえに、天候次第で定期船が欠航することもある。その場合は、受け入れ地区同士のネットワークを生かして、本土側の地区にも受け入れ先を準備しておいてもらう。

受け入れ後には

関係者で反省会を開き、改善も図ってきた。例えば、かまぼこづくり。住民センターで一緒に実施していた時は、大人数にまぎれて取り組まない子もいたので、いまは少人数に分けて担当の各家庭で体験してもらうようにしている。また、集落内の狭い道を大勢が行き来することへの苦情もあったが、スタッフが交通整理をして、島の人たちも理解してくれている。

近年、増えてきているのは、卵や魚、小麦粉、ごはん、



修学旅行生73人が14軒の受け入れ民家へ分かれて夕食と宿泊。

各種調味料などの食物アレルギー。前もって生徒の家から醤油が送られてきたり、食事をコンビニで買ってきていた生徒もいた。事前に交流公社から情報が来るので、各受け入れ家庭に伝えている。

民泊先の割り振りをするのは川上さんだが、民家で過ごす時間も、慣れないうちは生徒たちと上手くコミュニケーションがとれず、ぎくしゃくしたこともあったという。子どもたちの組み合わせには気を配り、名前を覚えるために、生徒たちに名札をつけてもらう。一軒あたり五、六人ずつのケースが多いが、自然な会話や交流ができるのは四人がベストだという。

島々の魅力を活かした「ほんもの体験」を

翌朝、島を離れる前の退村式で藤井校長は、「美味しかった、楽しかった、良かった、が生徒たちの感想。みんなの顔つきも緩んでいた。民泊先の皆さんと遅くまで話をして、福山のことも知ってもらえた。感謝の言葉しかない。卒業時に語られるのは、体験の思い出もそうだが、やはり島の人たちの魅力ではないか」と話した。一方、青島の住民代表からは、「皆さんの大きくなった姿を見てみたい。また青島に帰ってきてほしい」との挨拶があった。

同校の修学旅行は全体で二泊三日のスケジュー



翌朝の退村式の後、港にて。

ール。これから佐世保のパールシーリゾート（九十九島遊覧船）を経て長崎平和公園での平和学習、最終日は福岡の太宰府などを訪ねるといふ。

受け入れ家庭のお母さん方からは、「島の方言に興味をもってくれた」「自分からすれば孫くらいの年代。子どもたちの組み合わせ（友だち同士か体験グループ同士か）によっても異なるが、会話が盛り上がるよう気をつかう」「自分のことを母ちゃんと呼んでくれて嬉しい」との感想が聞かれた。

体験後、生徒たちの家族が来島するなど、その後の交流につながるケースもある。多くの人たちを惹きつける要因について川上さんは「体験プログラムは一つの手段。つまるところは島の人たちのあたたかさ、思いやりだろう」という。「ほんもの体験」で交流の先端へ――。各島々が継承してきた自然環境、ありのままの暮らしや食文化、生業の経験と技、そして小さな共同体が育んできた人の魅力こそがその礎石となる。他の島々にもその取り組みを拡げたい。

写真／小林 恵